

日本語教育実習における実習生の教育観の変化  
—内省を促す自己評価表作成の過程から—

日本語教育領域 田中 ルリ子

キーワード：日本語教育実習、実習生、教育観、振り返り、授業の評価、教師の成長

## I 論文の目的

日本語教育実習では、実習生が実習活動に至るまでに学習した理論や自身の経験に基づいて、自律的に授業を振り返る能力を身につけることが求められている。その方法の一つとして自己評価表が挙げられ、提示された評価項目に関して授業後に自身で振り返ることにより、実習生は実施した授業の観察・分析など自律的に短時間で振り返ることが可能となる。では実習生に対して、どのような評価項目を提示すべきであろうか。この点について考察するためには、まず実習生がどのような教育観を持ち、教師として成長していくのかを調査する必要があると考える。そこで本研究では、実習授業における自己評価表作成を目標に、まず日本語教育実習における実習生の教育観に注目し、実習生の教師としての成長の過程を明らかにする。各学年の教育観の変化を明らかにすることで、実習生の教師としての成長において影響を与えている要素を知ることができると思う。

## II 論文の構成

論文の構成は以下の通りである。

1. はじめに
  - 1.1 研究の目的
  - 1.2 本稿での用語について
2. 先行研究
  - 2.1 教師トレーニングから教師の成長への転換
  - 2.2 気づきから内省までの流れ
  - 2.3 教育観の意識化
  - 2.4 実習の評価活動に関する研究
3. 研究の方法
  - 3.1 研究対象について
  - 3.2 予備調査

- 3.3 自由記述式アンケート
- 3.4 実習への参加
  - 3.4.1 日本語教育実習Ⅱ
  - 3.4.2 日本語教育演習Ⅰ
- 4. 結果と考察
  - 4.1 予備調査
    - 4.1.1 実習生に対するアンケート調査
    - 4.1.2 学習者に対するアンケート調査
  - 4.2 本調査
    - 4.2.1 自由記述式によるアンケート調査
    - 4.2.2 キーワードによる比較
      - 4.2.2.1 各学年の特徴
      - 4.2.2.2 各キーワードの特徴
    - 4.2.3 カテゴリー別に見た評価観点の比較
      - 4.2.3.1 授業計画、準備段階
      - 4.2.3.2 授業実施
      - 4.2.3.3 学習者の反応
      - 4.2.3.4 他の授業との比較
- 5. 結論
  - 5.1 全体的考察
  - 5.2 研究の問題点
  - 5.3 今後の課題

### Ⅲ 論文の概要

2章では、論文に関係する先行研究について述べた。ここではまず教師トレーニングから教師の成長への転換、その中で生まれた「自己研修型教師」や「内省的実践家」について述べた。そして、気づきから内省の流れ、教育観の意識化、実習の評価活動という点を中心に、実習生がどのように授業を振り返り、教育観が形成されていくか、実習生の教師として成長に関する先行研究について述べた。

3章では、本研究の調査方法について述べた。研究方法としては、平成25年度在籍の愛知教育大学日本語教育コースの1年生から4年生までを対象に、「実習指導者」「授業の見学者」「学習者」「仲間の実習生」それぞれからどのような点で授業を評価してもらいたいという自由記述式のアンケートを実施した。その回答の中からキーワードを抽出し、そのキーワードが各学年にどのくらいの頻度で出現するのか、またその学年にのみ見られるものについて分析を行なった。次にアンケートの回答を「授業計画・準備」「授業実施」「学

習者の反応」のカテゴリー別に分類し、そのカテゴリーごとで回答が示す意味や、それが学年が上がるにつれどのように変化しているのか分析した。また実習生の様子や考え方を把握するために、実際に実習授業を観察し、授業後の反省会に参加した。

4章では、アンケートの結果から実習生がもつ教育観について分析を行った。分析を行う前にアンケート結果に関する仮説を立てた。

- 実習生がもつ評価観点は、1年生から4年生にかけて単純なものから複雑なものへ、表層的な特徴を持った観点から深層的なものへの変化が見られる。
- 実習授業に関して、実習生が担当する授業1コマ(90分)のみを重視する傾向から、他の実習生が担当する前後の授業とのつながりを重視し、実習授業全体を見る視点を獲得する。
- 「担当する授業」のみに注目すると、「教壇に立つ教師個人としての視点」、「学習者の立場になって考える視点」、「準備から反省までの全体を見る視点」という流れで、実習生の教育観が蓄積されていく。

以上の仮説と調査結果との共通点・相違点を検証し、教育観の変化の特徴を分析した。

まずキーワードを学年ごとに多く出現した順位に並べ、1年生から4年生までに出現したキーワードの特徴を分析した。その結果、共通して見られるキーワードや、実習生の成長に応じて出現しなくなるものも見られた。次に、学年全体で共通して見られたキーワードである「わかりやすさ」「内容」「学習者」「教え方」「指導案」に注目し、それぞれのキーワードが具体的に何を示すのかを調査した。その結果、1年生から3年生まではキーワードが含まれる回答の具体性が増加しているが、4年生で少し減少する傾向が見られた。自身が評価を受けたいと感じる観点は学年が上がるごとに複雑化するのではなく、1年生から3年生までに獲得した知識や技術を振り返ることから、4年生においてこのような結果が見られたのではないかと考える。

次にカテゴリー別に分類した回答について分析を行なった。またその分類の中で評価観点として挙げられた回答がどのような関係性を持っているのかを調査するため、マインドマップを作成した。その結果、「授業計画・準備」では2年生で準備への意識が生まれ、3年生になると指導案の作成へと意識が変化し、4年生では指導案作成を中心とした授業準備への意識が見られた。「授業実施」では、学年が上がるにつれて評価観点に具体性が増すだけでなく、まとまった要素が生まれ、それらについて追求しようとする成長の流れが見られた。しかし分類によっては、観点の変化に違いが見られた。特に教師による学習者への意識は、他の分類と比較して早く生まれることがわかった。1年生では学習者に対して抽象

的な考えを持ち、2年生になると学習者との関係性を重視するという変化が見られた。そして3年生では教室の雰囲気注目し、学習者にとってどのような雰囲気が日本語学習に効果的なのかを重視している。4年生では、1年生から3年生での回答で出現した観点の評価について、その出来具合を注視していた。このように学年が上がるにつれて学部生が持つ観点に具体性が増すだけでなく、まとまった要素が生まれ、それらについて追求しようとする成長の流れが見られた。また「学習者の反応」において、学年が上がるごとに項目が複雑化するという傾向は見られず、学習者に対する意識は見られるものの、具体性の欠ける結果となった。

5章ではこれまでの分析結果を踏まえて、学部生がどのような流れで教師としての成長していくのかを述べた。まずアンケート分析の結果から、1) 1年生から3年生にかけて次第に評価視点の種類や回答数が増え、2) 4年生になると、実習生それぞれがもつ教育観が出来上がり始めた、3) しかし分類によっては3年生から教育観の形成が始まった、という傾向が見られた。これらの結果から実習生の教師としての成長の流れを考察した。1年生は日本語教育に関する知識を学習し、2年生では実際に指導するために何が必要なのかを授業の構成を理解し始める時期だと考える。1、2年生は日本語学校や日本語教育機関への見学へ行くため、日本語を第二言語として教授する現場を見ている。授業における教師と学習者の動きや反応を観察することで、日本語の授業というものの構成をイメージすることができるようになる。そして自身が実習で指導を行なう際に必要な技術や要素を想定しながら、実習に臨むのではないだろうか。次に3年生では指導案中心の授業を行ない、基礎的な教授技術を身に付けようと試みる。そのため、教師の視点から見た授業に関する項目は多く出現し、さまざまな技術を習得しようと、視野を広げるのであろう。そして4年生になると、1年生から3年生までに学び、獲得した技術を振り返る傾向が見られた。実習の中で授業を振り返ることを経験し、改善を繰り返し行なうことで、同じ技術でもより高度なものを目指すのが、4年生の時期である。

次に実習生の教育観の変化について、分析前に立てた仮説と比較しながら考察した。

まず1年生から4年生にかけて単純な観点が複雑なものへと変化すると仮説をしたが、それは1年生から3年生の期間で見られた傾向であった。また学部生が持つ観点の分類ごとに異なる結果が得られた。特に指導案に関して必要性・重要性を感じ始めるのは、3年生からである。そのため、4年生においてもまだ具体的な項目は出現しなかった。意識し始める時期が早いほど、その技術が改善される頻度も多くなり、レベルアップのために試行錯誤を繰り返すことで、自己改善の力が養われていくのだと考える。また表層的な特徴を持った観点から深層的なものへと変化するという仮説に関しては、学年が上がるにつれて見られた。1年生から3年生においてほとんどの分類で回答数が増え、観点の具体性が増したが、表面的な内容も多かった。しかし4年生になると、知識と経験から自身に必要な指導技術を改善するために、何をすべきかより深く追求し始める時期だと考える。そのため、1

つの分類においてより深層的に評価観点を考える傾向にあった。

授業に関しては、実習生が担当する授業一コマ（90分）のみを重視する傾向から、他の実習生が担当する前後の授業とのつながりを重視していくと仮定した。自身が担当する授業内での教師としての意識、学習者への意識は学年が上がるにつれ、具体性が増し、4年生においては実習生それぞれがもつ教育観と照らし合わせながら、自身が重要であると感じる観点到に注目している。しかし前後の授業のつながりや実習全体を意識した項目は、4年生が回答した2点のみであり、「授業のつながり」に関する観点是学部生の段階ではあまり重視されていないことがわかる。

最後に「教壇に立つ教師個人としての視点」、「学習者の立場になって考える視点」、「準備から反省までの全体を見る視点」の流れで実習生の教育観が蓄積されていくという仮定について考察した。1年生、2年生では教師、学習者の視点から自身の行なう授業に対する評価を求める回答が多く出現し、3年生になると学習者に関する回答数が減少した。しかし、これは学習者の視点がなくなったわけではない。3年生では初めて外国人を前に授業を行なうため、教師としての視点に焦点を強く当ててしまう傾向にある。そのため、学習者の視点よりも、教師の視点が優先されてしまうのではないだろうか。そして実習授業を経験したことにより、4年生において、再び自身の授業を学習者の視点から見るようになる。では「準備から反省までの全体を見る視点」への変化は見られたのだろうか。準備に関する観点是2年生から出現し始め、3、4年生ではその準備として「指導案」に関する回答が多く出現した。一方、反省については2年生で「授業の予習・反省を行っていたか」「まじめに準備から反省までやっているか」、3年生で「教案準備から反省まで話し合えたか」という回答が見られた。反省に関する回答数は少ないが、前述したように実習授業では反省会が設けられるため、担当した授業を反省することに対して当然のものとして回答しなかったのではないかと考える。

つまり実習生の教育観は、実習生自身が持つ教師像の構築・再構築が繰り返されながら、実習生個々の特性・人格と結びつき、大学での授業など経験の中で変化していくものだと解釈できる。実習生は知識や経験、個性と照らし合わせ、自身にとって必要な指導技術を改善するために、何をすべきかより深く追求することで教師として成長していく。

これらの考察より、1年生から3年生を成長の第一段階、4年生から成長の第二段階とし、第二段階においては既に習得した指導技術や知識を振り返り、より高次の教師へと成長していくと捉えた。さらにこの振り返りに注目すると、一つの流れとして発達段階に応じて繰り返し学ぶというスパイラル型の成長が見られると考える。このスパイラル型の成長では、教師の指導技術が次第に多くの観点から、また視点の広がりやを伴いながら改善されていく。成長の段階ごとに自身の必要だと思う技術について内省し、一度は獲得した技術であってもそれを振り返り改善を行なうことで、よりレベルの高い教師へと成長を続けることが可能である。

今後の課題としては、実習生が持つ教育観と自己評価表作成をどのように結びつけるかを考える必要がある。教師の成長の流れとして発達段階に応じて繰り返し学ぶというスパイラル型の成長を提示したが、この結果をどのように自己評価表作成に反映させるかが課題である。今後は、大学の実習授業の自己評価表作成プロセスを試案し、実習生が教師として成長する過程へ貢献したい。

## 参考文献

- 秋田美帆 (2013)「教育観の意識下のプロセスとその要因 実習生による振り返りをデータとして」『言語文化教育研究』11, pp.221-240. 言語文化教育研究会
- アブドゥハン恭子・石東万里子(2006)「留学生対象の日本語教育への教育実習への受け入れ」『九州工業大学研究報告、人文・社会科学』154, pp.11-18.
- 池田玲子・小笠恵美子・杉浦まそみ子 (2002)「実習生の内省的実践としての授業評価活動」『世界の日本語教育』12, pp. 95-106. 国際交流基金
- 岡崎敏雄・岡崎 眸(1997)『日本語教育の実習 理論と実践』アルク
- 小笠恵美子・楊昌・金孝卿・郭末任・池田玲子(2002)「実習授業における教師の成長を目指す教授活動評価のあり方—大学院日本語教育実習の場合—」『内省モデルに基づく日本語教育実習理論の構築』平成 11 年～13 年度科学研究費補助金研究基盤研究 (C) (2) 研究成果報告書 (課題 11680312) , お茶の水女子大学大学院日本語教育コース発行, pp.73-80.
- 河上加苗(2007)「実習生とマニュアル—日本語教育実習生の成長とマニュアルの関係—」『日本語教育実践研究』6, pp.71-80. 早稲田大学大学院日本語教育研究科
- 国際交流基金(2010)『教え方を改善する』日本語教授法シリーズ 第13巻, ひつじ書房
- 斎藤有紀恵(2006)「日本語教育実習生の指導方法について」『信大日本語教育研究』6, pp.10-20.
- 副島健治(1999)「日本語教育実践における授業の振り返り」『ポリグロシア』2, pp.1-14. 立命館大学言語教育センター
- 常木由布子(2006)「教師は日本語教育実習で何を評価するのか —リュブリャーナ大学を例に—」『日本語教育連絡会議論文集』18, pp.50-56.
- 中川良雄(2004)「日本語教育実習指導モデルと授業評価システム」『研究論叢』63, pp.77-90. 京都外国語大学
- 中川良雄(2005)「『気づき』を促す日本語教育実習—日本語教育実習自己評価・他己評価—」『研究論叢』64, pp.139-154. 京都外国語大学
- 南部昌敏(1995)「教育実習生の内省を支援するための授業観察システムの開発と試行」『日本教育工学雑誌』18, pp.175-188. 上越教育大学学校教育研究センター
- 林巨樹編(2001)『現代国語例解辞典』第三版, 小学館

福岡昌子(2009)「日本語教育実習における他者への評価と他者からの評価に関する研究」『三重大学国際交流センター紀要』4, pp.25-36.

八木公子(2004)「現職日本語教師の言語教育観 ―良い日本語教師像の分析をもとに―」『日本語教育論集』20, pp.50-59. 国立国語研究所

山本由紀子(2010)「日本語教育実習プログラムの事前指導の再検討」『同志社女子大学学術研究年報』第61巻, pp.133-137.